

# ◆右京三条一坊三・四坪の調査

## —第288次・第290次

### 1 はじめに

本調査は工場改築にともなう事前調査で、奈良県教育委員会の依頼を受け実施した。調査地は平城宮南端から400mほど南に位置し、平城京の条坊復原では朱雀大路に面する右京三条一坊三・四坪にあたる。調査は、第288次調査（11月4日～12月26日）、第290次調査（1月19日～3月16日）の2ヶ次にわたり、総面積は約2000㎡である。第288次では調査区が北区と南区にわかれ、北区（約400㎡）は朱雀大路と三条条間南小路との交差点の検出を目的として設定し、南区（約600㎡）は四坪内の宅地の様相をあきらかにすることを目的とした。また、第290次でも調査区は東区と北西区にわかれ、東区（約900㎡）は三坪内の様相をあきらかにすること、北西区（約105㎡）は西一坊坊間東小路の検出をそれぞれ目的とした。

### 2 基本層序

南区では上から盛土、灰色土（遺物包含層）、黄褐色砂質土（整地土）、黄褐色粘質土（地山）となり、北区では上から盛土、耕土・床土、灰色系砂質土（遺物包含層）、褐色系シルト・粘質土（地山）となる。一方、東区では上から、盛土、耕土・床土、暗黄灰褐色土（遺物包含層）、黄灰褐色砂質土（地山）、北西区では工場解体により削平されているため、上から暗灰色砂質土（遺物包含層）、橙色粘土（地山）であった。遺構はいずれもほぼ地山面で検出した。調査区の原地形は北から南・西から東に緩やかに傾斜していたと考えられる。遺構面の標高は、それぞれ南区（62.6～63.0m）、北区（62.6～62.9m）東区（63.5～63.8m）、北西区（63.3～63.4m）である。  
（西山和宏）

### 3 検出遺構

#### 北 区

SD2600 朱雀大路西側溝。現状で幅約3.0m、検出面からの深さ約0.9m。溝底の標高は北端で61.5m、南端で61.3m。兩岸には部分的に護岸の杭が残る。

SD2618 北調査区中央を走る南北溝。この溝と朱雀大路西側溝との間に築地がつくられたと想像できる。三条条間南小路の設置に際し、小路上の部分埋め立てる。幅約3.0m。

SD2619 調査区南側の南北溝。三条条間南小路南側溝SD2621に取り付く。幅約0.5m。

SD2620 調査区南西端で検出した東西溝。東端は攪乱により破壊される。幅約0.4m。

SD2621 三条条間南小路南側溝。朱雀大路西側溝SD2600に取り付く。幅約1.1m。

SD2622 三条条間南小路北側溝。ある時期に、東端

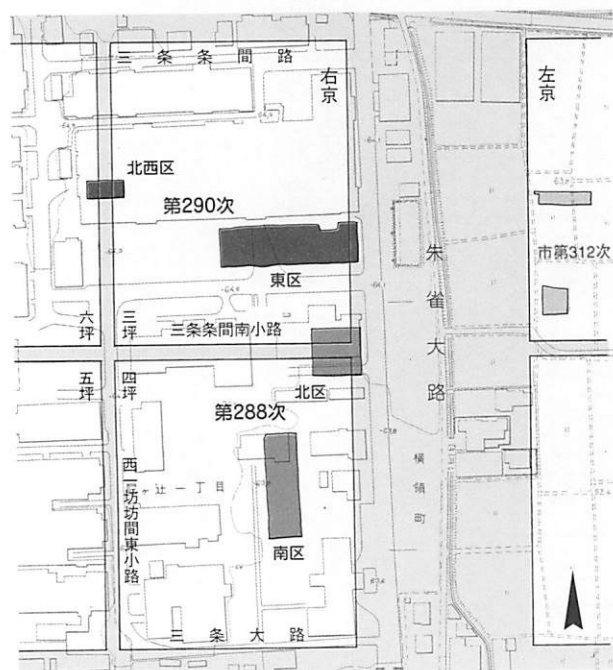


図46 右京三条一坊三・四坪 調査位置図 1:3000

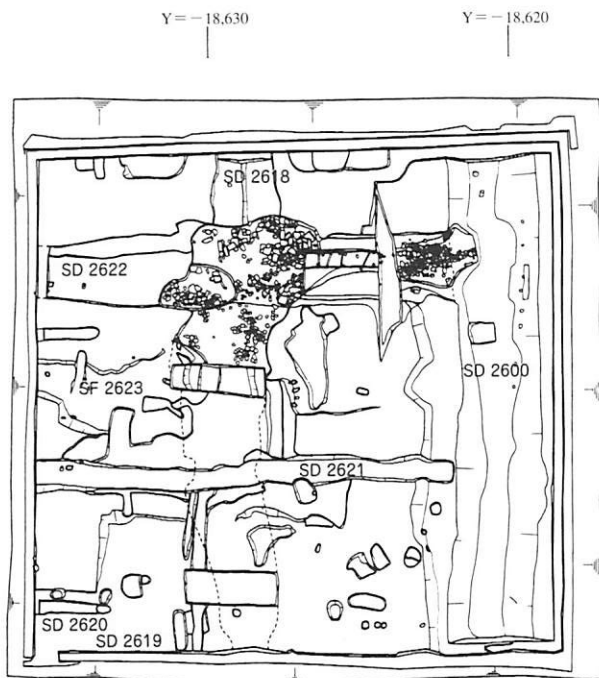


図47 第288次調査北区 遺構平面図 1:250

SD2600への合流部分の幅を狭め木樋につくり替える。  
幅約2.4m、木樋幅約0.5m。

**SF2623** 三条条間南小路。京造営当初は敷地を広く  
とるため、造成していない。道路幅は、南北両側溝の心  
心距離が約7mで、幅20大尺で設計されたと考えられる。

#### 南区

##### ①奈良時代の遺構

**SB2601** 調査区南端で北妻を検出した掘立柱南北棟  
建物。梁間2間。柱間寸法は6尺。

**SB2602** やはり調査区南端で北妻を検出した掘立柱  
南北棟建物。SB2601を建て替えたものらしい。梁間2間。  
柱間寸法は5尺。

**SE2604** 調査区南端近くの井戸。井戸枠は完全に抜  
き取られ、また抜取穴により掘形全体が破壊されている  
ため、本来の形状は不明である。現状は平面楕円形を呈  
する。長さ5.1m、幅3.3m、深さ約2m。

**SB2606** 調査区南半中央に位置する、桁行4間以  
上×梁間2間の掘立柱東西棟建物。柱間寸法は10尺。

**SA2607** 調査区中央を走る掘立柱東西塀。4間ぶ  
んを検出した。柱間寸法は7尺。

**SB2608** 調査区の北半東端で西側柱筋を検出した掘立  
柱建物。桁行5間、柱間寸法は7尺。塀の可能性もある。

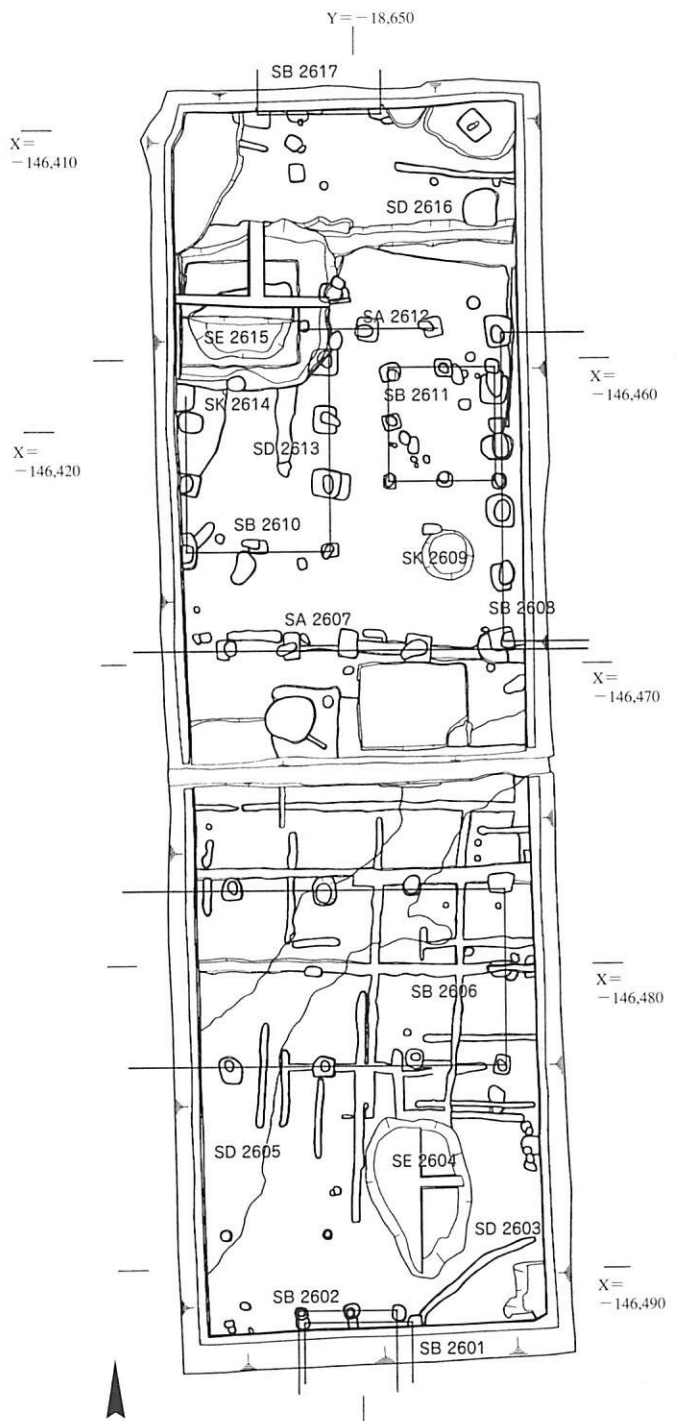


図48 第288次調査南区 遺構平面図 1:250

**SK2609** 円形の皿状土坑。径1.7m。

**SB2610** 調査区北半西側にある桁行4間×梁間2間の  
掘立柱南北棟建物。柱間寸法は7尺。

**SB2611** 調査区北半東側にある桁行2間×梁間2間の  
掘立柱建物。柱間寸法は6尺。

**SA2612** SB2611の北側にある掘立柱東西塀。確認し  
たのは2間ぶんのみであるが、SB2610の北西隅に取り付

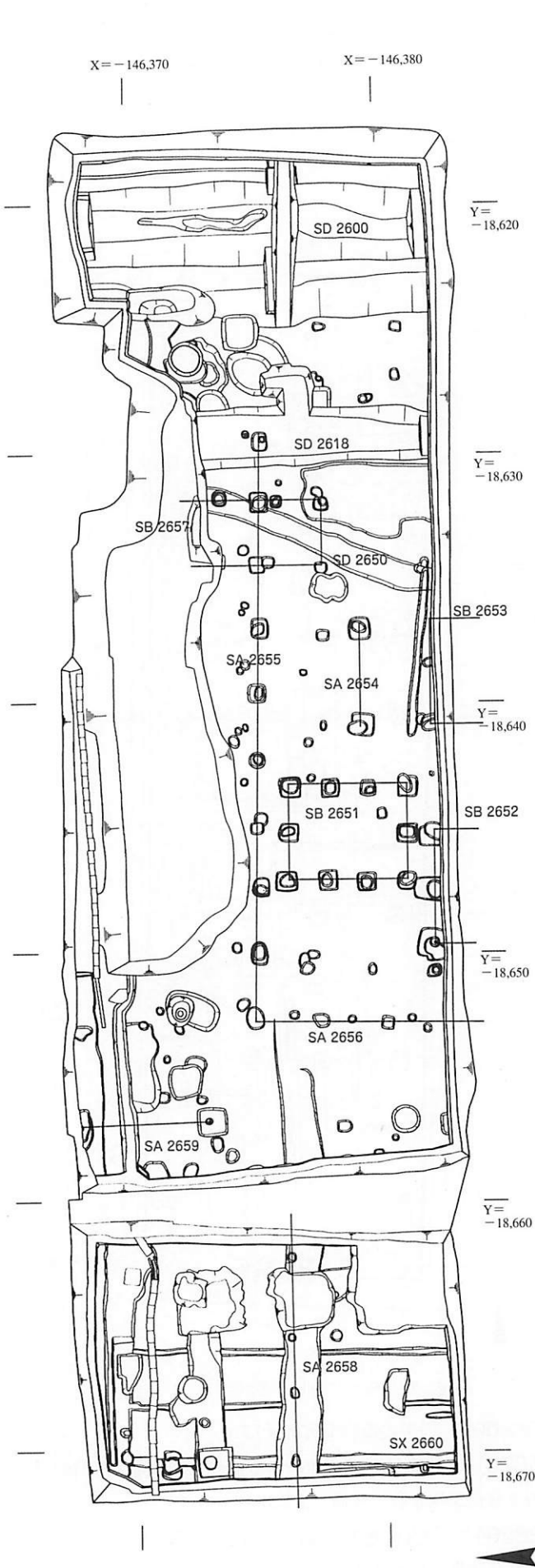


図49 第290次調査東区 遺構平面図 1:250

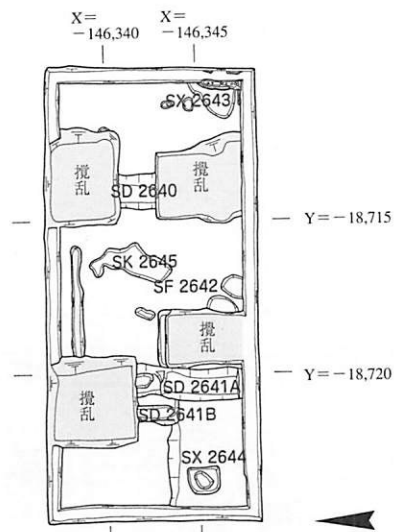


図50 第290次調査北西区 遺構平面図 1:250

く可能性がある。柱間寸法は7尺。

SD2613 調査区北半西側にある南北溝。約3mぶんを検出した。幅約0.7m。

SK2614 調査区北半西端にある大型土坑。東南部を検出したのみで規模は不明。北側はSE2615に切られる。

SE2615 調査区北西部にある井戸。掘形は東西4m×南北3.5mの方形。井戸枠は完全に抜き取られている。抜取穴の深さは検出面から約2.5m。

SD2616 調査区北東部にある東西溝。埋土がSE2615埋没時のものと同じであり、ほぼ同時に埋没したらしい。SE2615の北東部にとりつく排水溝と考えられる。

SB2617 調査区北端で南妻を検出した掘立柱南北棟建物。梁間2間。柱間寸法は7尺。

#### ②その他の遺構

SD2603 調査区南東隅にある斜行溝。SB2601の柱穴を切っており、奈良時代以降の溝である。

SD2605 調査区の南西隅から北東に伸びる斜行溝。堆積土は砂層で、それをSB2606柱穴が掘りこんでおり、奈良時代以前の流路らしい。堆積土から弥生式土器の破片が出土しており、その時期のものと思われる。(臼杵 勲)

#### 東区

##### ①奈良時代の遺構

SD2600 朱雀大路西側溝。溝底の標高は北端で62.1m、南端で62.0mである。

SD2618 調査区東側の南北溝。築地にかかわる遺構と考えられる。幅2.0m、深さ0.6mである。

SB2651 調査区中央にある桁行3間×梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに6尺。

SB2652 調査区中央南端で北妻の柱列を検出した梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は8尺。

SB2653 調査区中央東寄りにあり、南端で北妻を検出した梁間2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は8尺。

SA2654 調査区中央東寄りで検出した柱間1間の掘立柱東西塀。柱間寸法は13尺。目隠塀と考えられるが、築地の間に開く棟門の可能性もある。

SA2655 調査区中央で検出した柱間9間の掘立柱東西塀。柱間寸法は8.5尺。西端で南に折れSA2656となる。東端の柱穴はSD2618の埋土上ではなく堆積土上で検出した。SD2618と共存していた可能性もある。

SA2656 調査区中央西寄りで検出した掘立柱南北塀。柱間寸法は8.5尺で柱間3間ぶんを検出した。北端で東に折れSA2655となる。

SB2657 調査区東側で検出した桁行2間以上×梁間1間の南北棟建物。柱間寸法は桁行が6尺、梁間が8尺。

SA2658 調査区西側で検出した東西塀。柱間寸法は9尺で、3間ぶんを検出した。

SX2660 調査区南西隅で検出した土器埋納遺構。径30cm、深さ30cmの掘形内に土師器甕を埋置し、その上に土師器杯Aを反転させて蓋としたものである。これまで平城京で検出した土器埋納遺構には、須恵器の壺や杯、土師器甕を用いることが多いが、今回のように土師器の甕と杯Aのセットは初めての例である。土器は風化が著しいが、奈良時代中頃～後半と考えられる。銭などの内容物はないが胞衣壺の可能性もあり、現在土器内外の土壌試料の分析中である。

SA2659 調査区西側で検出した柱間1間の掘立柱南北塀。柱間寸法は20尺。築地の間に開く棟門の可能性もある。

## ②その他の遺構

SD2650 調査区東側にあり、北で東に振れる幅0.8m、深さ0.6mの斜行溝。遺物を含んでいないため、時期はあ

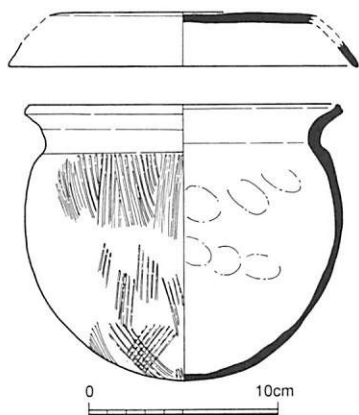


図51 土器埋納遺構SX2660出土土器実測図 1:3

きらかではないが、堆積土の性格などから古墳時代の溝と推定される。

(西山和宏)

## 北西区

主要な遺構は、西一坊坊間東小路の東側溝SD2640・西側溝SD2641Aおよび路面SF2642である。東西両側溝とも幅は約0.9m。側溝心および小路心の座標値は、 $X = -146,341.0$ の地点で東側溝心が $Y = -18,714.1$ 、西側溝心が $Y = -18,720.3$ 、小路心が $Y = -18,717.25$ 。溝心心間距離は6.2mとなる。西側溝はその後、やや西よりに位置を変えて(SD2641B)機能したようだ。

これ以外の遺構としては、東側溝東方の小杭列SX2643、調査区内では単独の柱穴SX2644、路面中央部に掘られた土坑SK2645がある。SX2643とSX2644は奈良時代の遺構とみることができ、このうちSX2644は南に延びて塀



図52 土器埋納遺構SX2660出土状況

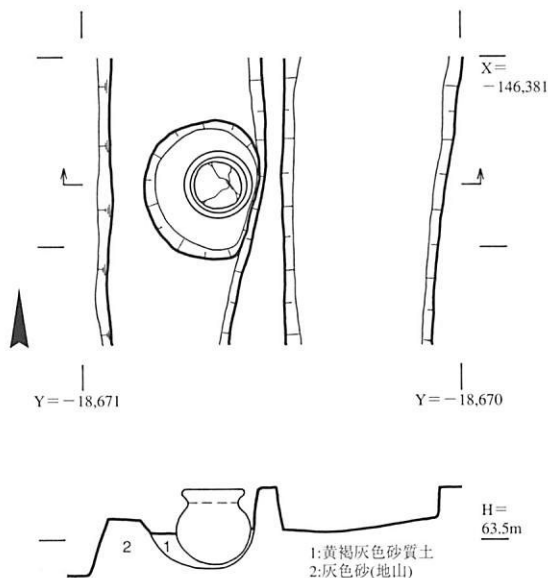


図53 土器埋納遺構SX2660遺構平面図(上)、断面図(F) 1:20

になるか、あるいは南と西に延びて建物になる可能性がある。SK2645はまったく遺物を含まないが、路面のほぼ中央という位置から考えて道路機能を失った平城廃都以後のものともみてよいだろう。(小野健吉)

#### 4 遺構変遷

調査区相互の対応が定かではないため、ここでは調査区ごとに遺構の変遷を述べる。なお、北西区については省略する。

##### 北 区

朱雀大路西側溝SD2600は奈良時代を通して機能しているが、その他の遺構については以下の変遷がある。

〈a期〉調査区中央を南北溝SD2618が通る。この時期には三条条間南小路が造られず、宅地は南北2町ぶん以上の広い占地がおこなわれたらしい。

〈b期〉三条条間南小路SF2623を造り、SD2618の小路部分を埋めるが、南北の宅地部分ではそのまま小路側溝に取り付けて継続使用する。当然、この変更の際に築地塀の部分的な造り替えのあったことが推定される。

〈c期〉三条条間南小路北側溝の朱雀大路西側溝取り付け部分を、幅を狭めて木樋に変える。そのためか、氾濫による浸食の痕跡がみられ、瓦片が大量に埋没する。SD2618は完全に埋め立てられ、南の宅地ではSD2619・SD2620などの小規模な溝が掘られる。

##### 南 区

北半の井戸SE2615の周辺では、遺構の切り合いによって変遷を推定できる。最も古い時期の遺構は土坑SK2614で、SK2614埋没後に、南北棟建物SB2610と東西塀SA2612を建てる。ただし、位置的に両者は共存しない

ので、それぞれと共存する遺構について検討してみよう。まず、調査区北端のSB2617の建物心は、SB2610の西側柱筋と一致し、柱間寸法も両者ともに7尺である。また、両者の間隔はほぼ20尺となる。一方、SB2610と南の東西塀SA2607との間隔はほぼ10尺であり、この3者は共存していたと考える。そして、SA2607が取り付く南北棟建物SB2608の柱穴は、SA2607の柱穴を切っており、これらは上記の3者より新しい。SB2610とSA2612の柱穴を切る井戸SE2615が最も新しく、溝SD2616と、SB2608の柱穴を切る小型建物SB2611が同時期と考えられる。

一方、南半は遺構が希薄であり、北半との対応は定かでない。ただ、建物SB2606の東妻がSB2608の西側柱と柱筋をそろえているので、同時期の建物と考える。また、南端のSB2601とSB2602は同位置での建て替えらしいが、北半のSB2611とSE2616を参考にすると、SE2604と併存し、調査区内の南北で井戸の周辺に小規模な建物を置く配置をとった可能性もある。

以上をまとめると以下の変遷がたどれる。

〈A期〉SK2614

〈B期〉SA2607、SB2610、SB2617

〈C期〉SB2608、SA2612、SB2606

〈D期〉SB2611、SE2615、SD2616、SB2601、SB2602、SE2604

なお、確実な根拠に欠けるが、SE2615より古いSD2613は、SB2610・SA2612と共存しないのでA期に、土坑SK2609は周囲に顕著な建物のないD期になる可能性がある。

(白杵 勲)

##### 東 区

東区は遺構が大変希薄であり、なおかつ切り合い関係

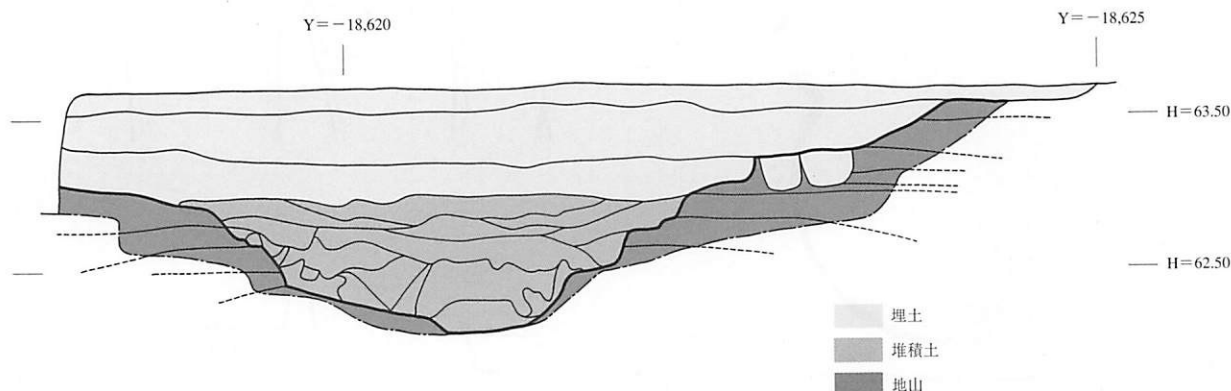


図54 朱雀大路西側溝SD2600断面図 (X=-146.376) 1:40

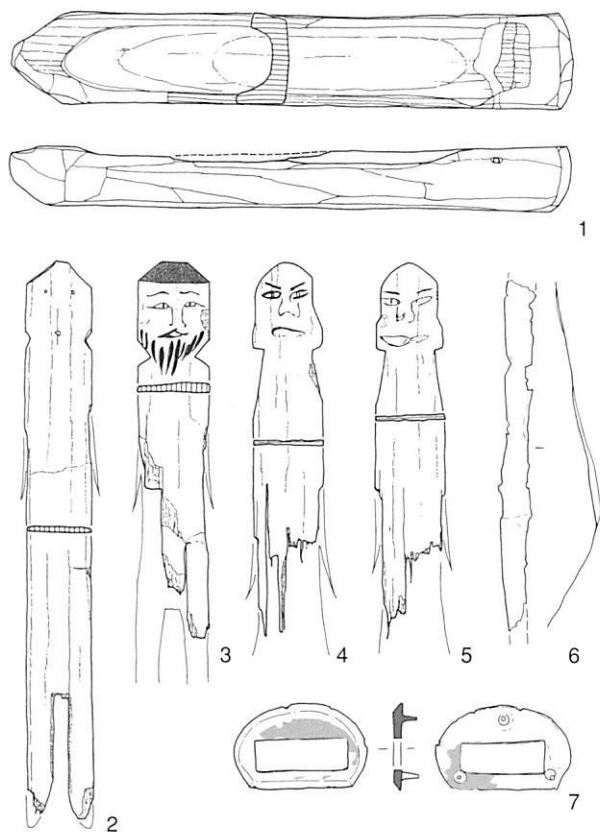


図55 第288・290次調査出土木器・金属器 1:8

もほとんどないことなどから、全体の変遷をつかむことは困難である。しかし、位置関係や数少ない切り合いから以下のような変遷が推定できる。

〈Ⅰ期〉SB2651、SA2654、SB2653、SA2658

〈Ⅱ期〉SA2655、SA2656、SB2652

〈Ⅲ期〉SB2657、SA2659

なお、土器埋納遺構SX2660の時期は、出土土器から奈良時代あるいはそれ以降と考えられるが、Ⅰ～Ⅲ期のいずれに属するかは不明である。(西山和宏)

## 5 出土遺物

出土した遺物は、第288次、第290次ともに少量であり、そのほとんどは朱雀大路西側溝SD2600から出土したため、以下にまとめて報告する。

### 木製品・金属製品

木製品は朱雀大路西側溝SD2600から、人形16点、棒状木器16点(うち3点は尖端)、曲物底板3点など合計51点が出土した(図55)。以下、遺存状態の良好な舟形1点、人形4点について報告する。1は舟形。広葉樹製。角棒状の素材を荒く削って、船首と船尾を作る。両側は若干破損している。船尾両側には側面から穿孔されている。同様の位置に穿孔や削り込みをする事例が散見する。当時の舟の設備を示すものであろうか。人形はいずれもヒノキ製。2・3は桎目板を切りとってつくる。ともに頭頂は台形に作り、頸部の切り欠きは小さな二等辺三角

軒丸瓦			軒平瓦			丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重量	点数
6225	?	1	6644	A	1	409.1kg	2,455
6273	B	2	6646	A	1	平瓦	
6274	A	1	6663	Cb	3	重量	1,196.4kg
6311	B	3	6664	F	1	点数	6,580
6316	Db	1	6682	B	4	塼	
型式不明		6		C	3	重量	5.2kg
				A	1	点数	8
				Gb	1	道具瓦・その他	
				型式不明	4	面戸瓦	2
						甃斗瓦	3
						鏡書瓦	1
軒丸瓦計			軒平瓦計				
13			19				

表10 第288次調査 出土瓦埴類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重量	点数
6316	C	1	6682	B	1	235.0kg	1,766
	Db	1		C	2	平瓦	
型式不明		1	型式不明		1	重量	646.5kg
						点数	4,630
						塼	
						重量	0.8kg
軒丸瓦計			軒平瓦計			点数	2
3			4			凝灰岩	
道具瓦						重量	1.3kg
面戸瓦		1				点数	1
甃切平瓦		1					

表11 第290次調査 出土瓦埴類集計表

形状で、両側縁に下から切り込みを入れ手を作る。2は浅く刻んで目・口を表現し、コ字形切り込みを入れ折り取って脚を作る。脚端を若干欠損するが、ほぼ完形。現存長22.2cm、幅3.1cm、厚さ0.3cm。3は顔面を墨描きし、脚部は欠損しているが、脚を作る際の切り込みが残り、やはりコ字形切り込みによるらしい。現存長14.9cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm。4・5は同形品。全8点の同形品が重なって出土した。すべて薄い板目材を切りとって作っており、顔面は下ぶくれにし、顔を墨描きする。頭部には下辺の長い三角形の切り欠きをいれ、なで肩に作る。両側縁には下から切り込みを入れて手とする。ともに脚部は破損している。4は現存長14.8cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm。5は現存長15.0cm、幅2.8cm、厚さ0.2cm。

6が銅製人形。細板に切れ目を入れて括れ部を表現する。7は銅製丸鞘。平板形式の表金具、両面に漆が残存する。(臼杵 勲)

### 瓦埴類

出土した瓦は表10・11のとおり。大半が北区のSD2618や東区のSD2600から出土した。(西山和宏)

### 土器・土製品

SD2600からは、整理用コンテナで約20箱の土器が出土した。古墳時代の土器を少量含む以外は、すべて奈良時代の土師器、須恵器と黒色土器で、確実に平安時代まで降る土器は出土していない。その中で、祭祀用土器・土製品が一定量みられるので、それを紹介する(図57)。

1は小型模造土器の甌。把手をもち、外面は縦方向の刷毛目、内面はヨコナデと横方向の刷毛目で調整する。2は小型模造土器の甕。口縁部外面をヨコナデし、胴部外面は不調製。3は小型模造土器の甗。小破片であるが、

内外面を刷毛目で調整する。4は墨書人面土器。土師器甕を使用したもので、頸部に横方向の墨線、胴部には縦方向の墨線を描く。5・6は土馬。粘土板を折り曲げて成形する奈良時代後半のもので、5は下半身と頭部上端、6は頭部を欠失する。

SD2600から出土した祭祀用土製品は、土師器小型模造土器の甕が4点、甕が9点、竈が16点、高杯が1点と、土馬が2点、土師器壺C使用の墨書人面土器が8点、土師器甕を使用した墨書人面土器が4点ある。他には墨書人面土器用の土師器壺B・Cが多数出土した。土馬の保存が比較的良好なほかは、いずれも破片であり、完形に復せるものはない。その中で土馬は製作技法や形態が酷似しており、セットとして製作したものを同時に使用したと考えられる。その他の土製品については断片的なものであり、出土状況からみても、この周辺で祭祀がおこなわれていたことは確かであろうが、右京域におけるSD920（奈文研『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984）や左京域のSD6400（奈文研『平城京左京七

条一坊発掘調査報告』1998）に比べ、大規模かつ恒常的なものではなかったと考えられる。（玉田芳英）

### 木簡

朱雀大路西側溝SD2600から21点出土した。このうち主要な木簡の積文を別掲した。①は召文の文書木簡である。裏面「内舍人尊」の記載が注意される。②は備中国下道郡からもたらされた米の付札である。六斗という量から考えると庸米付札であろうか。③は備後国西良郡からの米の付札である。④は「犬養部」の記載がある断片。⑤は隠伎国周吉郡からの軍布の付札である。養老4年（720）の年紀をもつ。⑥は阿波国の生鯨の付札である。⑦は米の付札であるが、断片のため詳細は不明。（古尾谷知浩）

## 6 まとめ

これまで朱雀大路に面する地点の発掘例は少なく、四条大路以北ではほとんどおこなわれていない。今回の調査は、貴重な事例を追加したといえよう。とくに右京三条一坊三・四坪を、ある時期に2坪全体を占有していた点は重要である。本調査地は、平城京では宮に近い一等地であり、長屋王クラスの最上級貴族の邸宅があってもおかしくない。また、宮外官衙の可能性も考慮すべきである。三坪は、平安京にあてはめると右京三条一坊三町であり、『拾芥抄』西京図によれば右京の行政をつかさどる役所（右京職）が存在した。また四坪は『拾芥抄』本文によれば、西三条第であった。残念ながら、本調査

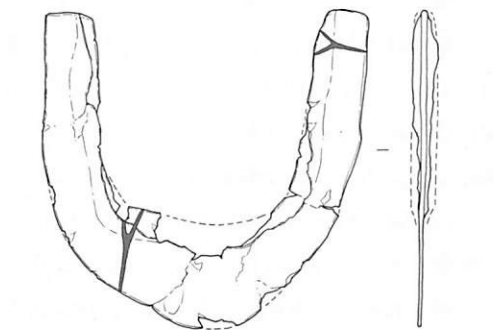


図56 朱雀大路西側溝SD2600出土鋤先実測図 1:3

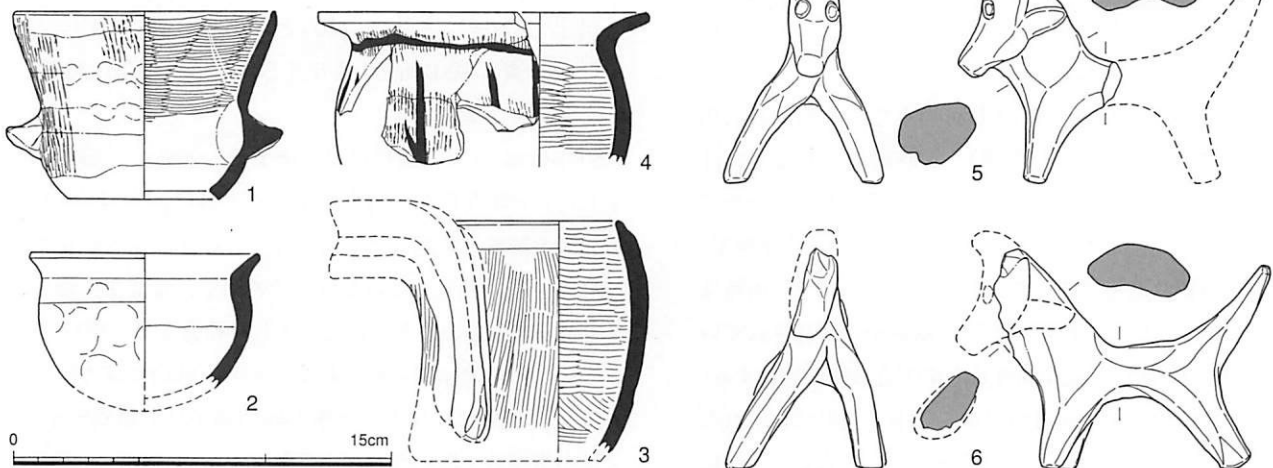


図57 朱雀大路西側溝SD2600出土祭祀用土器・土製品実測図 1:3

第二八八次調査出土土簡

朱雀大路西側溝SD二六〇〇

〔戸カ〕

- ①・召 氷□  
・内舎人尊 (77)・29・5 019

- ②・下道郡□ □□□□下道臣三止

〔米 斗カ〕

- 六 (165)・21・4 011

- ③・備後国西良郡□□米

- (109)・(12)・5 039

- ④ 犬養部 (72)・(13)・3 081

第二九〇次調査出土土簡

朱雀大路西側溝SD二六〇〇

- ⑤・隱伎国周吉郡奄可郷吉城里  
・服部屎人軍布六斤養老四年 128・26・3 031

- ⑥ 阿波国生蝮五十員 126・23・5 033

- ⑦ □波米五斗 (114)・24・5 039

区の遺構は大変希薄であり、出土遺物も少ないため、どのような機能をもった施設が存在したかを推し量ることは困難である。ところで、大学寮に推定されている左京三条一坊七坪（奈文研『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）は、やはり建物の密度が低い。宮外官衙を想定するならば、宮付近では空閑地が多い構造という共通性が存在

した可能性もあろう。いずれにしても、本調査区が奈良時代においてどのような利用をされていたのかは、今後の研究課題である。

条坊関係では、北西区で検出した西一坊坊間東小路と朱雀大路との関係について触れておきたい。朱雀大路は、平城宮の正門（南面中門）・朱雀門から平城京の正門・羅城門まで一直線に伸びる平城京のメインストリートである。したがって、その道路心は、朱雀門心と羅城門心をつなぐ直線と考えるのが最も適切であろう。朱雀門心の座標値は(X = -145,994.49, Y = -18,586.31) [奈文研『平城報告IX』1978] であり、羅城門心の座標値は井上和人氏の最新研究成果によれば(X = -149,771.38, Y = -18,569.12) [『平城京羅城門の再検討』『年報1998-I』] である。この2点を結んだ直線の国土方眼方位に対する振れはN0° 15' 39" W

となる。一方、西一坊坊間東小路は、今回の調査で得た道路心の座標値(X = -146,341.0, Y = -18,717.25)と平城宮跡第125次調査で得た九条大路北側溝付近での道路心の座標値(X = -149,738.32, Y = -18,701.87) [奈文研『平城京九条大路』1981] から、国土方眼方位に対してN0° 15' 34" Wの振れをもつことがあきらかになった。この2つの値はきわめて近似しており、朱雀大路心と西一坊坊間東小路心がほぼ正しく平行に施工されていることを確認した。また、今回の調査地点で西一坊坊間東小路と朱雀大路との心々間距離は132.50mという値を得る。これは1大尺=0.354mと仮定すると374.3大尺にあたり、西一坊坊間東小路が朱雀大路から心々間距離375大尺の計画線通りに施工されたことを示している。

(西山和宏・小野健吉)

平 城 専 こらむ 欄 ①

現場班メンバー一覧

	春	夏	秋	冬
考古第1	加藤真二	小林謙一	白杵 勲	高妻洋成
考古第2	玉田芳英	金田明大	川越俊一	
考古第3	清野孝之	岩永省三	井上和人	山崎信二
遺 構	箱崎和久	浅川滋男	蓮沼麻衣子	西山和宏
計測修景	高瀬要一	平澤 毅	内田和伸	小野健吉
史 料	山下信一郎	渡邊晃宏	館野和己	古尾谷知浩

色つきは総担当者

◆現場班ラインアップ

本年度は、秋を除く3現場で、95年度・96年度入所の新人がはじめての総担当者をつとめた。東面大垣とそれをはさむ2本の溝を掘った春現場(第274次)は、木簡ザクザクに総担当者、大興奮!ご満悦の日々がしばらく続いた。酷暑にたたられた夏現場は、東西一町ぶん(長さ110m)の溝(第281次)と東院園池の掘り残し部分(第284次)。作業員さんの呼ぶ声に、総担当者、東へ西へ往復。アルバイトの女子学生に、この総担当者の姿はどう映ったのか!? 奈文研初の女性発掘調査員を迎えた秋現場は、東院隅周辺(第280次)。復原すすむ庭園をよこ目に、隅楼の遺構解釈は大苦戦。あやうし、H女史!中規模調査2本をメインとした冬現場は、小規模現状変更調査の雨あられ。総担当者の好采配が光る! (H)